

覚鑿からみる院政期の王権と顕密仏教

—宗教文芸研究の射程から—

(要約)

平成 30 年度名古屋大学大学院文学研究科

学位（課程博士）申請論文

本論文は、院政期に高野山において活動した興教大師覚鑿の宗教実践と密教思想について、王権と深く結びつきながら形成された顕密体制とは何かを問うことを軸に、テキストの読解と分析に基づきながら考察するものである。

興教大師覚鑿（1095～1143）は、九州肥前国府藤津庄に生まれ、八歳の時に発心し、十三歳に上洛して仁和寺寛助のもとに師事した。その後、南都にて法相・三論など諸宗を遍学した。二十歳の頃に成仏を目指し、京都を離れて高野山に入住した。当時随一の権力者である鳥羽院の外護を得られた覚鑿は、高野山において真言教学を振興するために、長く中絶した伝法会を再開し、鳥羽院の御願寺として大伝法院を建立した。しかし、高野山上における相論と騒動の関係で、晩年の覚鑿は高野から離山し、根来に移住した。そして四九歳、根来の円明寺西廂で入定した。覚鑿聖人が真言密教を復興する一連の活動において、当時の権力の頂点に立つ鳥羽院の外護は絶大な影響力を及ぼしたが、聖人が在世中に経験した高野山、及び当時の宗教界の状況は、必ずしも平穏ではなく、まさに騒乱が続き続けた時代である。そのような覚鑿聖人が生きていた時代は、日本における中世のはじまりであり、いわゆる院政期である。

「院政」とは、天皇の代わりに上皇が国政を行う政治の一形態である。白河上皇に始まった「院政」は、「院政期」のはじまりとされる。院政期は、このような政治体制による時代区分である。院政という特殊な政治形態の本格的な確立とともに、中央集権的な律令制度に基づく古代国家の崩壊が進んでいくなか、交通と流通経済の発展、土地制度における荘園制の形成、貴族社会の階層的再編成、武士・領主・悪僧に代表される武力の出現など社会各方面の変化が激しく起こっていた。院政期において、古代律令国家の解体が進むなかで、国としての統合力を維持するため、仏教には支配イデオロギーとしての役割が最大限に期待されていた（黒田 1975）。特に、南都六宗に天台・真言の二宗を加えた八宗体制を軸とする顕密仏教は国家・民衆を支配するイデオロギーとして王権によって利用され、仏教そのものが政治過程の一部となる新たな秩序ができていった（上島 2004）。こうして、社会の激動期に当たった院政期は、単なる古代日本の終末ではなく、中世社会が確立した時期でもある（上島 2010）。

1960 以降、寺院資料の調査が盛んとなり、それをめぐる研究が進められていたなか、中世日本の荘園領主の性格、寺社勢力の実態、及び顕密仏教の在り方が一気に解明された。黒田が「顕密体制論」を提起したことにより、日本の中世史研究は「鎌倉新仏教中心史観」・「浄土教中心史観」から「顕密体制論」へと移行した。そして、「顕密体制論」は単なる政

治史と宗教史の問題だけではなく、経済・寺院組織・思想・教理・儀礼・文芸の研究もその射程に収められている。黒田の研究を継承した平雅行は「顕密体制論」には七つの特徴があると指摘した。即ち、(ア) 顕密仏教研究の必要性を提起した、(イ) 全体的視角を導入した、(ウ) 歴史的教理史を提起した、(エ) 中世国家の規定性を導入した、(オ) 中世社会の規定性を導入した、(カ) 技術史の規定性を導入した、(キ) 国際的契機の規定性を踏まえた(平2017)。

本論文は、歴史学の理論研究ではないため、「顕密体制論」への検討というより、その理論によって生み出された新たな研究の可能性と必須性を見ていくものである。本論において取り組む問題は、平にも指摘があるように、顕密仏教研究の必要性である。更に、本論は単なる顕密仏教をめぐる教理研究や政治過程の研究ではなく、宗教文芸研究の視座を導入したい。宗教文芸は実践的宗教行為のなかに形成されたものである。小峯和明が指摘したように「宗教文芸はもはや文字テキストを読みこなすだけのレベルではとらえきれない。行や作法をはじめ種々の実践をとめない、法会などのパフォーマンスや様々な言説、音声と身体を駆使した営みによって形作られるものである」(小峯 2017)。中世における宗教文芸、及びその土台となる宗教言説はまさに顕密仏教の在り方を如実に表象する。また、そのような宗教文芸研究は中世国家の規定性(方向性)とも関連する。本論では、宗教文芸の射程から、鳥羽院が構想した王権と顕密仏教の在り方とは何かを検討しようとする。そして本論において用いる宗教文芸は、特に仏教儀礼とそのテキスト、建築空間、仏教美術、またそれらめぐる教学論理と仏教説話などを指すものである。

近年において中世日本をめぐる、その研究領域の拡大とともに、学際的な研究が進められている。しかし、その主な成果は顕教と密教との相互浸透、また密教における顕教を包摂する教理の展開を出発点とするものである。顕密教理の融合ということ自体が持つ意義は不明瞭であり、顕密体制という中世日本の在り方をどのように理解すればいいのかという問題がなお残される。また、院政期をめぐる研究では、院政政治を創り上げた白河院、そして武家政権と深く関わる後白河院・後鳥羽院への検討が多くみられるが、その間にあって鳥羽院の宗教政策や宗教構想に関する考察は、必ずしも十分とはいえない。白河院は日本の歴史全体においても巨大な存在であるが、その後継者である鳥羽院は決して白河院の政権をそのまま継承していくわけではない。一方、中世の顕密仏教についての研究は、南都・天台・真言などの権門寺院に傾きながら、貞慶や明恵など一部の個人の宗教家への検討は教理研究次元にとどまることが多い。そうして、政治史、宗教史、教理研究などが大いに解明されていたが、一種の宗教文芸表象としての宗教家の思想、及びその活動の本質がみえなくなってしまう。それを解明することこそが、顕密仏教の実態と意義を浮かび上がらせることができるのではないかと考えられる。

本論では、日本院政期に活躍した、鳥羽院より篤い帰依を受けた真言僧覚鑊の宗教活動、及びその宗教思想を考察・分析することで、次の二つのことを解明したい。

ひとつには鳥羽院政の中に覚鑊という存在を再検討することで、鳥羽院における宗教構

想の特質を明らかにする。次には宗教文芸の視座から、覚鑿の密教思想、及びそれをめぐる宗教実践とそのテキストの生成を明らかにする。以上の二つの問題を検討することによって、単なる個人の宗教家の思想と活動が明らかにされるだけでなく、中世日本における王権と仏教の関係、及びそれとともに形成した顕密体制の特質への探究とも繋いでいる。

中世宗教文芸研究についての研究は、日本史、仏教史、建築史、美術史、芸能史などに関わりながら展開する、いわゆる学際的な研究が近年に多くみられるようになってきている。本論では、歴史理論と先学の研究成果を踏まえて、宗教文芸の視座を導入し、テキスト分析を中心に論を進めていく。本論では、(ア) 宣旨や綸旨、及び解状などをはじめとする歴史史料と、(イ) 経典、教相・事相などの仏教文献、更に(ウ) 縁起・伝記、願文・表白などの文学作品の諸位相のテキストを併せて区別しつつ、鳥羽院政と覚鑿の宗教実践を検討する。また、これまでに活用されなかった唱導資料や儀礼テキストとしての講式、及び覚鑿が書き残した瑞夢記などを一種の叙述資料として扱い、従来の歴史と文学の枠組みにとらわれず、顕密仏教の諸相を論ずる。

興教大師覚鑿に関する従来の研究は、その生涯を検討する歴史研究、覚鑿の著作をめぐる教相研究が多く挙げられる。歴史上における覚鑿聖人像に注目した研究は、中野達慧の『興教大師正伝』(中野 1934)、そして那須政隆の『興教大師伝』(那須 1941)が早い例である。また1975年に榎田良洪の『覚鑿の研究』が出版された(榎田 1975)。榎田は、伝記縁起類を中心とした中野の著作が「正伝」というタイトルを付すことに疑問を抱き、古文書と古記録類の検討を加えて、改めて覚鑿の生涯について論じた。榎田の覚鑿に関する指摘は、なお検討を要する問題と修正すべきところはあるが、それ以降の覚鑿研究において重要な基礎的業績として評価される。榎田の研究により、真言行者としての覚鑿がその生涯において、どのような経緯で自らの宗教活動を行ったのかを詳しく知ることができる。だが、『覚鑿の研究』はあくまで歴史上の覚鑿像を中心とする研究であるため、覚鑿の教学上の内容、教理的な問題についての考察は十分ではない。一方、榎田の研究と対応するように、仏教教学の側面より覚鑿を検討するのは、松崎恵水の『平安密教の研究—興教大師覚鑿を中心として』である(松崎 2002)。松崎は、覚鑿の著作を分析するのみではなく、同時代の学僧の教相書と比較しながら、覚鑿の密教思想について検討した。以上のほか、覚鑿に関しては、その生涯と仏教教学両方から紹介した勝又俊教の『興教大師の生涯と思想』(勝又 1992)、それに覚鑿密教の特質、浄土信仰、曼荼羅観など、幅広い視野から覚鑿研究の成果を集成した論集『興教大師覚鑿研究』(1992)がある。また、同時代史における覚鑿をより立体的に探究した成果として、苫米地誠一の『興教大師覚鑿聖人年譜』があげられる(苫米地 2002)。苫米地は、覚鑿が生きていた白河・鳥羽院政期の宗教界の状況を時間軸で把握し、そのなかに存在する覚鑿、及びその教団の実態を検討した。それにより、覚鑿、及び大伝法院側の活動が同時代の仏教史の動向のうちに位置付けられ、より一層明らかになってきた。

これまでの先行研究によって、覚鑿の密教思想と宗教実践、及びその周辺の動向が大いに解明された一方、次のような課題がまだ残される。

一、時代のなかにあらわされる覚鑿聖人像への検討は充分ではない。それは覚鑿に関する史実を集めて考証し紹介するという意味ではない。院政期という宗教が社会全体に大きな影響力を与える時代のなかで、「聖人」という身分の密教行者でありながら、鳥羽院の篤い帰依と強い外護を受けた覚鑿の位置付けをあらためて考える必要が感じられる。

二、覚鑿の密教への考察は教理研究に集中する傾向がみられる。覚鑿の密教そのものは、単に書物として存在するわけではなく、覚鑿の宗教実践と密接に関わるものでもある。そのため、宗教実践のなかでその思想と信仰がどのように表象されていたのかを検討しなければならない。

三、密教教学の継承とは異なり、言説上において覚鑿聖人がどのように記憶されていたのかはまた検討する余地がある。覚鑿をめぐる靈驗譚や逸話などが文学作品に多くみられるが、それらの話の成立や意図などを明確にするため、言説上における覚鑿聖人像の変貌への検討からの研究が必要となるであろう。

以上のように、本論文は諸先行研究を踏まえ、院政期という時代の特徴を念頭におき、上に述べた覚鑿聖人に関する三つの課題を明らかにするため、論を進めていきたい。

【第一部】鳥羽院と高野山大伝法院

時代のなかの覚鑿聖人像を検討するため、その生涯の焦点となる一大事業である高野山大伝法院の造立をめぐって考察する。覚鑿聖人は永く中絶した伝法会を復興するため、鳥羽院の外護のもとに、長承元年(1132)に高野山において大伝法院の落慶供養が行われた。更に、大伝法院は鳥羽院の御願寺として建立されたものである。本論文は第一部において、御願寺である大伝法院の創建経緯、及び覚鑿在世中における寺院組織の変遷、更に大伝法院で行われた仏事法会について論ずる。

第一章 大伝法院創建からみる鳥羽院と覚鑿

第一章では、大伝法院の創建と寺院組織の確立とともに、座主職の更迭をめぐる大伝法院と金剛峯寺、また東寺と高野山との相論について考察した。大伝法院は鳥羽院の御願寺として造立され、覚鑿に帰依した鳥羽院は巨大な荘園を寄進した。また大伝法院の寺院組織が鳥羽院の院宣によって本格的に確立された。それに対し、高野山金剛峯寺側が大伝法院の僧侶の身分が低いことや、他宗兼学することなどを理由で覚鑿と大伝法院を非難した。しかし金剛峯寺が指摘したことは鳥羽院には問題されなかった。また、大伝法院の座主は金剛峯寺の座主を兼摂し、座主職は覚鑿の門跡より選りだし、満山治行せしめたことが院宣によって定められた。それは恐らく鳥羽院の意志によるものと考えられる。その目的は、高野山を高野住侶のもとに管理せしめ、高野山一山の体制を作ることである。更に、その体制の成立は王家への祈禱を前提にしたものでありながら、高野山一山の知行と仏法・王法の興隆は、そのすべてが鳥羽院政のもとに行われることが望まれただろうと指摘した。

第二章 御願寺としての大伝法院

第二章では、白河院と鳥羽院における御願寺造立事業の異同に注目し、第一章の内容を踏まえた上に、大伝法院領の立荘や仏事法会などの儀礼を検討し、鳥羽院の御願寺として建立

された大伝法院の特質を論じた。院政期において、洛東白河の地で造立された六勝寺は、その建立を実質的に取り仕切ったのは白河院である。そして六勝寺の造営とともに、顕密仏教が強化された天皇権威の上に立脚した院権力によって再編成された。それに対し、鳥羽院は白河院が構想した天皇権威から逸脱した。鳥羽院の構想では、院の御願寺こそが国家的宗教構想の中核に置かれ、院の追善供養と鎮護国家を修する儀礼を通して、院こそが王法と仏法を統合する存在であると世間に示唆した。鳥羽院は寺院の内部から諸宗を受け止め、既存の顕密体制をそのまま生かそうとしたと考えられよう。そうして、鳥羽院の御願寺として建立された高野山大伝法院は、そのような鳥羽院の宗教構想によって支えられたものであると指摘した。

以上により、第一部では御願寺である大伝法院をめぐる鳥羽院政と顕密仏教の問題を論じた。それらの検討のなか、「聖人」としての覚鑿像が徐々に明らかとなってきた。覚鑿は自らの修行に専念しながら、高野山の一山体制が崩壊しそうな際に、自ら鳥羽院と積極的に交渉する行動がみられる。それはある意味で覚鑿が鳥羽院の主宰する高野山の一山体制の護持者であることを意識したと推測される。そうして、中世権門体制のもとに高野山大伝法院の創建、及び高野山内部における寺院組織の更迭が実現できたのは、鳥羽院の顕密融合の宗教構想と覚鑿の諸宗兼学の宗教実践と共鳴した結果であろう。

【第二部】 宗教空間に表象される密教思想

覚鑿の密教思想を理解するため、その著作に書かれた仏教教説のみではなく、覚鑿の宗教実践にも注目する必要がある。本論文の第二部は、覚鑿が自ら宗教活動を行う「場」に焦点を当て、寺院空間の形成において覚鑿の思想がどのように反映されていたのかを検討する。

第三章 創建大伝法院からみる覚鑿の密教観—本堂後壁絵を中心として—

第三章では、覚鑿が創建した高野山大伝法院本堂の内部荘厳について考察した。御願寺として造立された大伝法院本堂の内部には、空海創建の東寺講堂の影響を受けながら、覚鑿独自の密教観をあらわすように荘厳された。大伝法院本堂の東西に両界曼荼羅が懸けられ、その後壁に胎蔵界側には南天鉄塔図、そして金剛界側には守護経に基づき、如来形の釈迦成道図が描かれた。そのような組み合わせは、覚鑿の独自の創案だと考えられる。胎蔵界側に南天鉄塔図を描くのは南天鉄塔の中に両部大法が納められ、龍猛菩薩が金剛薩埵よりそれらを授けられたことを意味する。金剛界側に描いた如来形の釈迦成道図は、空海の『守護経』に対する解釈に基づきつつ、台密安然の教学からの影響もみられる。大伝法院本堂において、密教教主の大日如来、及び大日に結ばれた金剛薩埵、また鳥羽院のための尊勝仏頂尊という三尊を安置した上に、護国思想をはらんだ『守護経』と両界曼荼羅を組み合わせることにより、覚鑿が自らの密教護国思想と真言教学の復興を大伝法院本堂に集約的に表象し、院の御願寺としてふさわしい宗教空間を創り出したといえよう。

第四章 密教空間からみる覚鑿の宗教実践—密厳院を中心として

第四章は、第三章で論じた公的空間である大伝法院と対応するように私的道場としての密厳院を検討した。密厳院は覚鑿が密教修行を行う場でありながら、自らの臨終の地として定めたものでもある。密厳院本尊の大日如来は、密教の教主でありながら、行者臨終の際に來迎する本尊でもあり、阿弥陀如来と重ねる性格を有するものであると覚鑿によって説かれた。そして、『寺役転輪集』という唱導資料によると、覚鑿が構想した密厳院の宗教的意義は、覚鑿の入滅後にも本尊を通して保たれていた。また、覚鑿が密厳院において行われた宗教実践には不動明王を本尊とする火生三昧が挙げられる。その修法は密教の即身成仏のためであると同時に、臨終正念と浄土往生の護持の願いもこめられていた。覚鑿の即身成仏の実践と順次往生の信仰が、大日如来と不動明王に与えた性格から読み取られた。また、密厳院に関しては、建立当初の資料は少ないが、「密厳院瑞夢頌」や「不動講秘式」など覚鑿の著作の再読解によって、覚鑿の密教的浄土信仰の実態が解明された。

第二部の考察を通して、儀礼の場である大伝法院と密厳院は、覚鑿の密教思想と宗教信仰を集約したものであり、覚鑿がそれらの“空間”を自らの理論構築の一つのステップとして構想したと想定することができる。大伝法院という「公的」な空間において、覚鑿は顕密両方に影響されながら、自らの密教構想と護国観のもとに、御願寺として相応しく荘厳した。それに対し、「私的」空間である密厳院において、覚鑿は本尊の性格を介して、自らの密教的浄土信仰を実践した。そこには、院政期における顕密融合の一つの実態があらわれている。顕と密の融合では、相互的に包摂するというより、むしろ顕密仏教はそれぞれの独自性を持ちながら、ともに時代に応じて展開していく。

【第三部】言説による思想・信仰・伝承の生成

第三部は、歴史上にあらわれる覚鑿聖人から言説上に語られる覚鑿聖人へと視点を移す。第三部において、覚鑿をめぐる言説を取り上げ、覚鑿がどのように信仰され、また記憶されていたのかを考察し、更にその記憶はどのように変貌してきたのかを明らかにする。

第五章 覚鑿撰「多聞天講式」考

第五章では、覚鑿撰「多聞天講式」について考察した。講式は儀礼のために作られたものでありながら、それ自体が制作者の思想に基づき、信仰の実践として伝承されたものでもある。講式は儀礼テキストとしながら、一種の叙述資料、或いは制作者の“言説”として扱うことができるだろう。覚鑿は「多聞天講式」において、『金光明最勝王經』と『法華經』に説かれていた多聞天信仰、及び当時流行していた多聞天をめぐる浄土信仰に基づき、自らの密教思想と融合して末法における修行の易行化と真言密教による救済を説いた。一方、「多聞天講式」の制作をめぐる、種々の靈驗譚が作成された。覚鑿の「多聞天講式」は大伝法院の建立と密接な関係をもつ神聖な式文として信仰されていた。そして、式文が法流内部に厳重に伝承されていく過程で、伝記・縁起における多聞天説話の変貌と伝承にも影響を与えたことを指摘した。

第六章 安楽寿院不動堂における信仰の伝承

第六章では、第二章で言及した洛南鳥羽にある安楽寿院の不動堂に関して検討した。久寿二年（一一五五）に供養された安楽寿院不動堂の供養願文により、不動堂は鳥羽院の順次往生と極楽往生を祈る場であったと知られる。そのような浄土往生と不可分に関わる不動信仰は、同時代の実範と覚鑿によって撰述された臨終行儀書から明らかに位置付けられる。安楽寿院不動堂にみられる不動信仰、及び貴族社会における受容は、恐らく覚鑿のような当時の貴族と深い関係を持つ宗教家の実践によって定着していった。安楽寿院不動堂の供養は、浄土信仰と関わる不動明王信仰の中世的展開として位置付けられるだろう。

一方、安楽寿院不動堂は藤原忠実が鳥羽院に造進したものであるが、近世に作られた安楽寿院の縁起では、覚鑿聖人の造立であると語られた。それは、真義真言教団に属した不動院が自らの正統性を強調するためであると同時に、安楽寿院不動堂における覚鑿伝承は、中世より展開された覚鑿に関する不動説話の延長線でもある。中世において創出した覚鑿をめぐる不動明王説話は、覚鑿の不動信仰と宗教実践を母体としたものだと考えられ、その点は覚鑿の著作や談義の記録である『打聞集』に記されていた覚鑿の言説より確認される。

更に、藤原忠実の言談の筆録である『中外抄』を考察した結果、忠実における鳥羽院に対する感情と覚鑿に対する思いが重ねられたことが知られ、“天狗”としての覚鑿聖人像が忠実と鳥羽院との複雑な関係のなかに語られたものである。また、忠実の造進を受けた鳥羽院は、不動堂において公的な鎮護国家と私的な浄土往生を同時に期待していたことは、本尊不動明王の胎内奉納品より明らかである。

以上により、第三部は覚鑿をめぐる宗教言説を考察した上に、言説に基づき、信仰と伝承がどのように生成し、また変貌していったのかを論じた。覚鑿は既存の信仰を受容しながら、自らの密教論理を介して再解釈し、また新たな言説と儀礼を創り出した。数多くに作成された講式や、『覚鑿聖人伝法会談義打聞集』のなかに覚鑿自身による歴大な説話などがそれを証左する。覚鑿による言説は覚鑿の宗教実践のなかに創出されたものであり、覚鑿の密教思想と密接に関わるものであり、また覚鑿をめぐる信仰と伝承を生成する基盤でもある。

このように、本論文では覚鑿聖人が高野山における一連の造立事業を分析し、鳥羽院の御願寺として建立された大伝法院の性格を解明しつつ、鳥羽院の国家的宗教構想の一端を読み解いた。また、覚鑿の宗教実践を考察したことで、鳥羽院政期における王権と顕密仏教の一つの実態を明らかにした。鳥羽院は白河院が創出した天皇権威による顕密仏教の統合をはかる御願寺の構想とは異なり、院権力による御願寺において、院自らの追善供養と鎮護国家を同時に祈ることで、顕密仏教そのものは院権力の一部であることを示唆しようとした。そのような鳥羽院の宗教構想の一つの鑑となったのは覚鑿が創建した高野山大伝法院なのである。そして覚鑿は鳥羽院の顕密仏教に対する構想を理解し、院の宗教政策の実践者として位置付けられるだろう。

参考文献：

黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店、1975年。

上島享「中世国家と寺社」『日本史講座 三』東京大学出版会、2004年。
上島享『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会、2010年。
平雅行『鎌倉仏教と専修念仏』法藏館、2017年。
小峯和明（監修）原克昭（編）【シリーズ】日本文学の展望を拓く3『宗教文芸の言説と環境』笠間書院、2017年。
中野達慧『興教大師正伝』世相軒、1934年。
那須政隆『興教大師伝』興教大師八百年遠忌局出版部（護国寺内）、1941。
櫛田良洪『覚鑿の研究』吉川弘文館、1975年。
松崎恵水『平安密教の研究—興教大師覚鑿を中心として』吉川弘文館、2002年。
勝又俊教『興教大師の生涯と思想』山喜房佛書林、一九九二年。
興教大師研究論集編集委員会編『興教大師八百五十年御遠忌記念論集 興教大師覚鑿研究』春秋社、一九九二年。
苫米地誠一『興教大師覚鑿聖人年譜』ノンブル社、二〇〇二年。